推　薦

令和４年度入学試験問題

②　国　　語

［注意］

1　すべて放送の指示に従いなさい。

2　印刷が不鮮明なときは手をあげなさい。

3　答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

桜花学園高等学校

一　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。なお、1～4は段落の番号です。

1　二十世紀は、「わかる」が当然の時代だった。自分はわからなくても、どこかに「正解」はある――人はそのように思っていた。既にその「正解」はどこかにあるのだから、恥ずかしいのだとしたら、その「正解」を知らないでいることが恥ずかしいのであり、「正解」が存在することを知らないでいることが恥ずかしかったのである。だから、人は競って大学へ行ったし、子供達を競わせて大学に行かせた。ビジネスの理論書を必死になって読み漁ったし、誰よりも早く「先端の理論」を知りたがった。それをすることと、現実に生きる自分達が知らないままでいる「正解」を手に入れることとは、イコールだと思っていたのである。

たとえば、大学へ行くことを当たり前にして、多くの日本人は、大学がそうたいしたものではないという幻滅に訪れられた。しかし、それは果たして、「日本の大学がたいしたものではないから」なのか、あるいはまた、日本の大学に「自分達の思い込みをなんとかしてくれるだけの万能性[注1]がなかったから」なのかはわからない。だからこそ、「日本の大学はたいしたものではない」と思ってしまった人達の中には、「外国の大学だったらまた別かもしれない」という思い込みだって生まれる。外国の大学へ行くには金がかかる。「それだけの金がかかる以上、外国の大学にあるものは〝本物〟であるはずだ」という思い込みだって生まれる。外国の大学には外国の大学なりのよさとすごさはある。しかし、それと「外国の大学だからすごい」という思い込みとは、別である。それが、「自分達の知らない世界にはまだすごいものがあって、そこには〝正解〟があるはずだ」と思い込んだ結果なら、①外国の大学だとて、「どうってことはない」のである。

たとえばまた、大学を出て社会人になり、しばらくして壁にぶち当たることがある。その時に、「会社を辞めて大学に入り直そう」という決断をする人もいる。それは、あるいは必要なことかもしれない。しかし、もしかしたらそれは、錯覚かもしれない。「社会に出て未熟な自分のメッキ[注2]が剥げた」という事実があるのなら、その未熟さは、自分で克服しなければならない。その克服手段が「大学に入って学び直せばなんとかなる」であるのは、もしかしたら、短絡[A]かもしれない。この人が、「自分は正解から離れた。大学には正解がある。その正解に近づけば、もう一度成功を取り戻すことができる」と思い込んでいるのだとしたら、この人のあり方は、「どこかに自分の知らない正解はある」と思い込んでいる②二十世紀病なのである。

二十世紀は、イデオロギー[注3]の時代であり、進歩を前提とする理論の時代だった。「その〝正解である理論〟をマスター[注4]してきちんと実践できたら、すべてはうまく行く」――そういう思い込みが、世界全体に広がっていた。そういう状況の中では、「［　　B　　］」という考え方もたやすく生まれるだろう。

（中略）

2　「どこかに〝正解〟はあるはずだ」という確信は動かぬまま、理論から理論へと走って、理論を漁ることは流行となり、流行は思想となる。やがては、なにがなんだかわからない〝混迷の時代〟となって、そこに訪れるのが、「正解である可能性を含んでいる（はずの）情報をキャッチしなければならない」という、情報社会である。

どこかに「正解」はあるはずなのだから、それを教えてくれる「情報」を捕まえなければならない――そのような思い込みがあって、二十世紀

末の情報社会は生まれるのだが、それがどれほど役に立つものかはわからない。しかし、「〝正解〟につながる（はずの）情報を仕入れ続けなければ脱落者になってしまう」という思い込みが、一方にはある。だから、それをし続けなければならない。それをし続けることによって得ることができるのは、「自分もまた〝正解はどこかにある〟と信じ込んでいる二十世紀人の一人である」という一体感だけである。だからこそ、情報社会の裏側では、［　C　］の知れない孤独感もまた、同時進行でひっそりと広がって行く。情報社会でなにを手に入れられるのかは知らないが、情報社会の一員にならなければ、③情報社会から脱落した結果の孤独を味わわなければならないからである。

そもそもが「恥の社会」である日本に、「自分の知らない〝正解〟がどこかにあるはず」という二十世紀病が重なってしまった。その結果、「わからない＝恥」は、日本社会に抜きがたく確固としてしまったのである。

3

しかし、その二十世紀は終わってしまった。終わって行く二十世紀には、「もしかしたらもう〝正解〟はないのかもしれない……」という不安感が漂（ただよ）っていた。どこにも「画期的な新理論」はない。理論の代用物でもあった「画期的なヒット商品」もない。パソコンやインターネットが画期的であったとしても、それがどこまで必要なのかはわからない。なぜかと言えば、その〝必要〟は、「どこかに正解があるはず」という、二十世紀的な思い込みの上に存在するものだからである。

よく考えてみればわかることだが、「なんでもかんでも一挙に解決してくれる便利な〝正解〟」などというものは、そもそも幻想の中にしか存在しないものである。「二十世紀が終わると同時に、幻滅もやって来た」と思う人は多いが、これもまた二十世紀病の一種である。二十世紀が終わると同時にやって来たのは、「幻滅」ではなく、ただの「現実」なのだ。

人はこまめに挫折を繰り返す。一度手に入れただけの自信は、たやすく役立たずになり変わる。人は（注5）たんびたんびに「わからない」に直面して、その疑問を自分の頭で解いていくしかない――これは、人類史を貫く不変の真理なのである。④自分がぶち当たった壁や疑問は、自分オリジナルの挫折であり疑問である。「万能の正解」という便利なものがなくなってしまった結果なのではない。それを「幻滅」と言うのなら、それは、「なんでも他人まかせですませておける」と思い込んでいた、不精者（ぶしょうもの）の幻滅なのである。

二十世紀に定着してしまったものは「個人の自由」だが、そこから生まれるのは、「自分の挫折は自分オリジナルの挫折である」と言い切る権利である。「自分オリジナルの挫折」は、結局のところ、自分で切り開くしかないものなのである。

4

二十世紀が終わって、人間は再び過去の次元に戻った。そこでは、困難を切り開くものは、常に「自分の力」だった。「自分の力」がふるえるようになる前に、「どうしたらいいのかわからない、なにがなんだかわからない」という混迷に呑み込まれても不思議ではない。人類は常に、そういうところからスタートしてきたのである。

「わからない」は、あなた一人の恥ではない。恥だとしたら、「この世のどこかに〝万能の正解〟がある」とばかり信じて、簡単に挫折しうる「自分自身の特性」を認めないことが恥なのである。「特性」がいいものだとは限らない。

「どこにも正解はない」という〝混迷〟の中で二十世紀は終わり、その〝混迷〟の中で二十一世紀がやって来た――そう思ってしまったら、

もう二十一世紀は終わりだろう。⑤「わかる」からスタートしたものが、「わからない」のゴールにたどり着いてしまった。これが間違いであるのは、既に言った通りで、であればこそ二十一世紀は、人類の前に再び訪れた、「わからない」をスタート地点とする、いとも当たり前の時代なのである。

（橋本　治「『わからない』という方法」）

（注）1　万能…すべての物事に効能があること。
2　メッキが剥げた…うわべだけのごまかしがきかなくなって次第に本性があらわれること。
3　イデオロギー…人間の行動を決定する、根本的な物の考え方のこと。また、それぞれの社会階級に独特な思想のこと。
4　マスター…ものにすること。
5　たんぴたんぴに…「たび」を強めた言い方。そのたびごとに。

問一　太線部A「短絡」の対義語は何ですか。次の□に当てはまる漢字一字を答えなさい。

□重

問二　空欄 B に入る文として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　自分の現実を変化させる〝錯覚〟はどこかにある
イ　自分の現実を再び取り戻す〝本物〟はどこかにある
ウ　自分の現実をなんとかしてくれる〝正解〟はどこかにある
エ　自分の現実を克服するだろう〝情報〟はどこかにある
オ　自分の現実をゆるやかに導く〝万能〟はどこかにある

問三　空欄 C に入る言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　気心　　イ　底　　ウ　気
エ　素性　　オ　得体

問四　傍線部①「外国の大学だとて、『どうってことはない』のである」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　外国の大学に行くにはお金がかかるが、日本よりもいい教育が受けられるとは限らないから。
イ　外国の大学と日本の大学を比較し、勝手な思い込みで優劣を決めてしまっているから。
ウ　外国の大学にしか「本物」の「正解」はないと思っているが、日本の大学にも「正解」はあるから。
エ　外国の大学には自分たちの知らない「正解」があるはずだと思い込み、「正解」を求めているから。
オ　外国の大学と日本の大学とでは、「正解」が異なるし、「本物」を求めるなら日本の大学の方がいいから。

問五　傍線部②「二十世紀病」とありますが、「二十世紀病」の人はどのような思い込みに囚（とら）われているのですか。その思い込みにあたる箇所を第2段落の本文中から二十字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。（句読点や括弧も一字に数えます）

問六　傍線部③「情報社会」とありますが、筆者の言う情報社会とはどのような社会ですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　「正解はどこかにある」と信じる人々と一体感を持つことを目指す社会。

イ　「正解」を教えてくれるはずの情報を手に入れ続けなければならない社会。

ウ　何が「正解」かという情報がはっきりしており「正解」が容易に手に入る社会。

エ　「正解」を求め続ける一方で「正解」が見つからなければ深い孤独を感じる社会。

オ　「正解」を求めて情報を集めるが結局それは思い込みの「正解」にすぎない社会。

問七　傍線部④「自分がぶち当たった壁や疑問は、～不精者の幻滅なのである」とありますが、この部分に関して以下の問いに答えなさい。

(1)　なぜ筆者は「不精者」と言っているのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　誰かの出した正解をあてにしているから。

イ　あるはずの正解を見つけられなかったから。

ウ　万能の正解などはないことがわかっていないから。

エ　他人の出した正解なのに幻滅してしまっているから。

オ　幻滅と現実の区別すらつかなくなっているから。

(2)　筆者は、「壁や疑問」に当たった際「幻滅」するのではなくどうするべきだと言っていますか。その方法を本文中から十字で抜き出しなさい。（句読点や括弧も一字に数えます）

問八　傍線部⑤「『わかる』からスタートしたものが、『わからない』のゴールにたどり着いてしまった。これが間違いであるのは、既に言った通りで」とありますが、なぜ間違いになってしまうのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　「わからない」ことを恥だと考えてしまい最終的に求めるべき正解にたどり着けないから。

イ　二十一世紀の「わからない」はスタートでもゴールでもないということを理解していないから。

ウ　二十一世紀の「わからない」は二十世紀的な正解を求める「わからない」とは違うから。

エ　二十世紀でも二十一世紀でも「わかる」というのは「自分自身の特性」の中にしかないものだから。

オ　「わかる」も「わからない」も同じであり、むしろ「わからない」からスタートするものだから。

問九　本文の内容に合致するものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　二十世紀は「正解」を求めるために大学に行ったが、二十一世紀は自分で本物の「正解」を探す時代だ。

イ　「二十世紀病」とは、どこかに「正解」があるはずだと考えて一度手に入れた「正解」に満足してしまうことである。

ウ　「二十世紀病」に加え、日本には「恥の文化」があったことが、「正解」を求める思い込みをさらに加速させた。

エ　情報社会では「正解」につながる上質な情報を人々で分け合うことが重要である。

オ　「万能の正解」がなくなってしまった後、「自分オリジナルの挫折」がようやく生まれる。

問十　この文章を授業で読んだSさんは、内容を以下のようにまとめました。空欄 X ・ Y に入る最も適当なものを後の各群から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

二十世紀はどこかに「正解」が存在し、その「正解」を探す時代だった。「正解」を知らないことは恥ずかしいことであり、人々はどこかに X 正解があると思い込んでいた。そのため、「正解」である可能性を含んでいる情報をいかに手に入れるかが大切であり、情報を仕入れ続けることで安心感も生まれるが、逆に情報が手に入らなければ孤独を味わうことになる。しかし、二十一世紀は Y ことを前提に自分自身で考える時代なのである。

X

ア　自分だけの
イ　共通の
ウ　誰も知らない
エ　自分の知らない

Y

ア　どこにも正解はない
イ　どこかに正解はある
ウ　わからない
エ　わかる

二　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

小学三年生である福本一平はドモリ癖(注一)があった。彼の小学校に音楽教師として秦直子が着任する。教頭の金田は彼女に一平のことを説明している。

教員室の窓から、生徒たちが遊んでいる運動場がみえた。つめたい空気のなかで、女の子は縄とびをして、男の子たちは走りまわっている。

さっきの鼻たれの男の子がボールを蹴って皆と一緒にそれを追いかけている。だがその群のなかに一平の姿はみえない。①

「あの子、勉強はできるんですか」

「ドモるせいか、やはり体操や音楽は駄目でねえ。でもほかの学科はそう悪くはないようだね。動物が非常に好きで、学校の兎小屋の世話なんか、進んでやっていますな」

「兎小屋の？」

「まだ、見とられませんか。運動場の隅に――そう二宮尊徳の像があるでしょうが。あの奥に父兄の寄附で作りましてな。あの子は休み時間や放課後もよく、そこに行っとりますよ」

十分の休み時間が終わり、次の授業開始を告げるベルが鳴り、遊んでいた子供たちが騒ぎながら教室に戻ってくる。

皆に少しおくれて福本一平が運動場から戻ってくるのに直子は気がついた。石を蹴りながら彼は一人で歩いている。

金田先生が秦直子に教えた通り、五時間目の授業がすむと一平はほかの生徒たちのように校門のほうに向かわず、兎小屋に駆けていった。

兎小屋にくると、彼はランドセルのなかから紙包みを大事そうに取りだした。輪切りにした人蔘が包みの間からコロコロと地面にこぼれた。幾分、水気のなくなったその人蔘を金網のなかに押しこむようにして落としてやる。

「サブ」

と彼は声をかける。

兎はやさしく温和しそうな動物にみえるが、本当は兇暴な性格も持ちあわせている。学校のほかの生徒たちはそれに気づいていないが、一平はこうして毎日、兎を見ているうちわかったのである。

金網のなかで赤い眼をこちらに向けている何匹かの兎から、少し離れて耳の一部に傷跡のある兎がいる。②一平はそいつにサブという名をつけた。いかにも、一人ぼっちで、さびしそうにしているからである。

小さな小屋だが、兎たちはそのなかで縄張りをこしらえあう。強い兎は自分の縄張りに弱い兎が入ってくると、徹底的にこれを苛める。サブはイジメられっ子で、仲間たちからいつも嚙まれているのだ。

「サブ」

ふしぎなことには、兎の名をよぶ時、一平はドモらなかった。周りに誰も見ておらず、相手が兎だという気やすさと不安感のなさが彼の舌をなめらかにするのかもしれない。

（たべろ。たべろってば）

彼が入れてやった人蔘はサブと別の兎との中間に転がったのに、サブはうずくまったまま取ろうとしない。素早く、そばに駆けよったのはもう一匹のほうで、赤い硝子玉のような眼で一点を見ながら、人蔘をたべはじめた。

（サブは……ぼくだ……）

と一平は③心のなかで哀しく呟く。音楽の時間、ドモるため皆について

いけぬ自分の姿が彼の心にうかんだ。皆と一緒に遊んでいる時、友だちは彼に気を使ってくれるが、彼もまた気を使う。

人蔘を全部、金網のなかに入れると一平はランドセルを背負って運動場を横切った。

放課後の運動場にはもう皆の姿は見えなかった。ただ校舎の何処からか、ラッパの音が聞こえてきた。この前にふった雪が黒く、よごれて二宮尊徳の銅像の横に残っている。

校門を出ると、彼は学校前の文房具屋に寄ろうか、どうか考えた。その文房具屋には鉛筆やノートだけではなく、メンコ(注2)やビー玉や模型飛行機なども売っていた。一平はそこで色鉛筆を一本買うつもりだった。

A　、その時急に店の硝子戸をあけて三人の女の子が姿をあらわした。三年三組の女の子たちでその一人が中原朋子だと一平は知っていた。彼と家が近所だったからである。鼻が少し上をむいた負けん気の子で、登校の途中、顔をあわせてもいつもツンとしている。

④気の弱い彼は三人のうしろから、ゆっくりと歩いた。できれば追いぬきたかったが、女の子たちはそういう時、急に彼をみつめ、小さな声で何かを囁(注3)きあうのだ。何を囁いているのかわからないが、一平は自分のドモリが嘲けられているような気がいつもするのである。

三人の女の子にできるだけ近づかぬよう距離を保ちながら、一平は時折、家々の垣根をさわったり、小石をかるく蹴りながら歩いた。彼は自分の部屋に飼っている蟻や二十日鼠のことを考えていた。

瓶のなかに土を入れ、十匹ほどの蟻を入れておくと、彼等の巣が見えると少年雑誌で読んでから、彼は三つの瓶のなかに蟻の群を飼いはじめた。蟻たちはせわしく、土のなかに坑道のような地下道と、その奥に巣とをつくり、毎日、一平がやるパン屑や菓子のかけらを勤勉に運んでいた。

彼はそのほか、たくさんの虫も飼った。八幡神社の池からオタマジャクシを取ってきて、それを蛙に育てたこともあったし、唾のかたまりのようなカマキリの卵から、小さな無数の子供を自分の部屋で生ましてもみた。今、彼が実験しているのは、母親からもらった鶏卵を綿箱と電気の熱で孵化することだった。できるか、どうか、わからないが、家に戻れば彼は親鶏のようにもう何日も温めているその卵を自分の体温で温めてやるつもりだった。

阪急(注4)電車がガードの上をゴオッと音をたてて通りすぎた。そのガードをぬけると、彼の家はもう間近だった。ガードの向こうから野球ミットをもった少年が二人、おりてきた。一平はその姿をみると、道の隅に急にたちどまった。〈Ⅰ〉

立ちどまった彼に気づいて、一人の少年がミットからボールを空に投げて、それを巧みに受けとめた。〈Ⅱ〉

「ド、ド、ドモリやで」

とその少年はドモリの真似をして聞こえよがしに叫んだ。

「ド、ド、ドモリが、あ、歩いとるぜ」

突然、その少年はボールを一平に投げつける恰好をした。〈Ⅲ〉本能的に身を避けようとする一平に、

「ドモリ、こわいんか」

三人の女の子たちは立ちどまり、ふりかえった。〈Ⅳ〉女の子たちの視線を意識して、少年は、

「そばに寄ると、ドモリがうつるで」

それからボールを一平の足もとに転がした。ボールはかるくバウンドして彼のそばを通りぬけた。〈Ⅴ〉

「拾わんかい。拾うてんな。拾ってちょうだいな」

一平が黙って歩こうとすると、
「ドモリ。拾うてくれへんのか」
彼等は笑いながら、ゆっくり近づいてきた。
［　B　］一平は彼等のニヤニヤとした顔をみつめていた。自分がドモリのために不当に苛められるのはこれがはじめてではなかった。
「返事せんのんか」
「できへんね。こいつ。ドモリやさかい」
「今日は、と言うてみ。コ、コ、コンニチワと言うてみ」
彼等はボールを拾いあげると、ふざけあいながら駆けていった。一平は肩のランドセルをふりあげるようにして歩きだした。
「［　C　］」
突然、声がした。それは今のなりゆきを見ていた中原朋子の声だった。
女の子たちが今の一部始終を目撃していたことをその時彼は、はじめて気がついた。気づくと同時に恥ずかしさと屈辱感とで、その場にしゃがみこみたくなった。
「放っときなさいよ」
と別の女の子が朋子をとめている。
「可哀想やわ」
「可哀想なこと、あらへん」
と朋子は頑なに首をふった。
「喧嘩もようせえへん男の子は……弱虫やもの。あの人、弱虫やさかい、うち、弱虫いうただけや……」
一平は怒りにかられて怒鳴りかえそうとした。だが、怒った時、彼はいっそう、みじめにドモることを知っていた。
⑤足もとに落ちている小石をひろって、女の子たちに投げつけた。小石は朋子ではなく、そばにいた別の子の肩にあたった。
「なに、するのよ」
一平はもう駆けだしていた。うしろで泣き声が聞こえた。
家の門をくぐると庭の奥で犬が嬉しそうに吠えた。

（遠藤周作「彼の生きかた」）

（注）1　ドモリ…物を言うときに、なめらかに声が出なくてつかえたり、同じ音を何度も繰り返したりすること。
2　メンコ…ボール紙で作った円形または四角形の玩具。地上に置いた相手のものに打ち当てて裏返らせたりする。
3　嘲ける…見下して笑う。
4　阪急電車…大阪、神戸、宝塚、京都などを結ぶ私鉄の一つ。

問一　傍線部①「その群のなかに一平の姿はみえない」について、なぜ一平の姿がみえないのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　外は非常に寒く、身体が丈夫でないため、遊ぶことが禁止されていたから。
イ　友達とけんかして、外でいっしょに遊ぶ気持ちになれなかったから。
ウ　先生にじっと観察されているので、目の届かないところに行きたかったから。
エ　同じ年頃の子供と遊ぶより、物言わぬ動物のそばにいるのが楽だったから。
オ　孤独を好む少年であり、周囲から一定の距離を置かないと気が済まなかったから。

問二　傍線部②「耳の一部に傷跡のある兎がいる」について、傷跡がついている理由を説明している一文を本文中より抜き出し、最初の五字を答えなさい。（句読点や括弧も一字に数えます）

問三　傍線部③「心のなかで哀しく呟く」について、一平の心情を説明した文章として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　サブの中に自分の姿を重ね合わせ、みじめさを痛いほど感じている。

イ　サブの中に自分を見いだし、これからは、もっと強くならなければならないと反省している。

ウ　サブが人蔘を食べてくれないのは、自分が嫌われているからだと考えている。

エ　人間を拒絶しているサブに、共感しながらも、疑問を抱いている。

オ　人蔘をサブに食べてほしかったのに、他の兎に食べられてしまい悔しい思いをしている。

問四　空欄 A に入る言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　そして　　**イ**　また　　**ウ**　だが

エ　たとえば　　**オ**　あるいは

問五　傍線部④「気の弱い彼」と対照となる表現を本文中より六字で抜き出しなさい。（句読点や括弧も一字に数えます）

問六　本文には次の一文が欠落しています。本文中〈Ⅰ〉～〈Ⅴ〉のどこに補うのが適当ですか。記号で答えなさい。

「いつか、その一人に小石を投げられたことを思いだしたからである。」

問七　二重傍線部「聞こえよがし」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　当人が思ってもいないことを、周りの人が勝手にいいあうさま。

イ　当人がそばにいるのに気づかないふりをして皮肉や悪口をいうさま。

ウ　当人や周りの人にはっきり伝わるように、大きな声でいうさま。

エ　そばにいる当人に賛同を得るように、一音一音ていねいにいうさま。

オ　周りの人にはっきり伝わるように、音を区切り区切りいうさま。

問八　空欄 B に入る言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　眼を細めて

イ　眼を白黒させて

ウ　眼を大きくあけて

エ　眼を輝かせて

オ　眼をうるませて

問九　空欄 C に入る言葉を三字以内で本文中より抜き出しなさい。（句読点は不要です）

問十　傍線部⑤「足もとに落ちている小石をひろって、女の子たちに投げつけた」について、なぜ一平は石を投げつけたのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　日頃から自分のドモリが馬鹿にされており、ムシャクシャしていたから。

イ　いじめっ子の少年に対する怒りの行き場がなく、女の子たちに当たるしかなかったから。

ウ　女の子に同情されたみじめな姿を見られないように、遠ざけようとしたから。

エ　朋子に好意を寄せている気持ちの裏返しとして、反抗的な態度を示そうとしたから。

オ　怒鳴りかえしたかったが、言葉ではドモるため行動で訴えるしかなかったから。

問十一　本文を読んだ生徒たちの感想として、適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　生徒A「方言での会話を多用することで、読者に親近感を与えているね。」

イ　生徒B「一平が自宅で昆虫や小動物を飼う情景描写は、一平の動物に対する思いがうかがえるね。」

ウ　生徒C「いじめっ子の少年が登場することで、一平の無頓着さがさらに強調されるね。」

エ　生徒D「女の子たちとのやりとりでは、一平のプライドが傷つく様子がよくわかるね。」

オ　生徒E「ドモリという一平の設定が、読者に同情心をおこさせ、関心を抱かせるね。」

三　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

昔、近江に住む身分の低い翁が都の市場に行き、当時は珍しかった鏡を見つける。

鏡はその頃、はじめて熊野より広まり、都にばかりこそありけるを、（都にだけあったのだが）翁、いかで知るべきなれば、（知るはずがないので）不思議に思ひ、取りて見れば、はなはだ光（とても）りて円き物なり。のぞきて見れば、美しき女房、色々の財宝、映ろひに（映ったので）ければ、翁は、「円き物の中にあるよ」と心得て、（理解して）「この円物、買はむ」（買おう）といふ。①商人をかしくて、「値千両」といへば、すなはち黄金千両取り（すぐに）出でて、（x）買ひ得にけり。

翁、わが家に帰りて、都にて円物の中に求め得たる美しき女房、色々（見つけた）の財宝、母・女房にも見せまほしけれど、「いやいや、折もこそあらめ」（見せたかったが）（機会があるだろう）と思ひ、②唐櫃の底に深く納め置きけり。

女房（妻）、ほの見咎め、あやしければ、翁が留守を待ちて、（y）取り出し見れば、はなはだ光りて円き物なり。③のぞきて見れば、女あり。さてこそ女房を迎へ来たりて、④隠し置きけるなり。腹立ちや、口惜しや（翁が留守になるのを待って）と思ひて、⑤母を招き、「これ見たまへ。都より女を連れ来たれるなり。（これを見て下さい。）恨めしくこそ」とて泣きけり。

翁、山より帰りけり。女房（妻）は青ざめ、気色（顔色を変えて）変りて、わなわなと震ひ、片膝を立てて翁にいひけるは、「都より迎へ来たりたまひし女房こそ。飯さへ整へて参らせむと思ひ、その設けもなく、（せめて食事を準備してさしあげようと思いますが、）不都合なる仕方に（ひどいやり方です。）こそあるなれ。年齢にも［はぢたまへかしや］。恨めしや恨めしや」とて、（恥ずかしくお思い下さい。）乳・胸を叩いて泣き叫びけり。

翁、ともかくもいはばいよいよやかましく、近きあたりの人々立ち聞（近所の人々が）かむも恥かしければ、（z）うつくしみゐてつくづくと思ふに、「この円物あらむ限りは、家安からじ。とかくこの円物こそ、わが仇なり。退治（家は安心できないだろう）せむ」と思ひ、重代の太刀取り出だし、⑥散々に切り砕きけり。

（おとぎ草紙「鏡男絵巻」）

問一　波線部（x）「買ひ得にけり」、（y）「取り出し見れば」、（z）「うつくしみゐて」の主語を次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。（同じ記号を何度使っても構いません）

ア　翁　　イ　商人　　ウ　都より迎へ来たりたまひし女房

エ　女房（妻）　　オ　近きあたりの人々

問二　［はぢたまへかしや］を、現代仮名づかいに直しなさい。

問三　傍線部①「商人をかしくて」とありますが、商人は何がおかしかったのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　ただの鏡なのに、その中から美女や財宝が出てくると翁が信じているから。

イ　ただの鏡なのに、その中に美女や財宝が入っていると翁が誤解しているから。

ウ　ただの鏡なのに、商人の魔法の鏡だという言葉を信じてしまっているから。

エ　ただの鏡なのに、お願いすれば何でも出てくると翁が思い込んでしまっているから。

オ　ただの鏡なのに、美女や宝物などの都の様子を映し出すことができると翁が信じているから。

問四　傍線部②「唐櫃（からびつ）の底に深く納め置きけり」とありますが、「翁」はなぜこうしたのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　母や妻には見せる必要がないと思っていたから。

イ　母や妻がやたらと見たがるのを不快に思ったから。

ウ　母や妻に見せると消えてしまうことがわかっていたから。

エ　母や妻に見せる前にもう一度自分で確認したかったから。

オ　母や妻にはいい折をはかって見せようと思ったから。

問五　傍線部③「のぞきて見れば、女あり」とありますが、どういうことですか。この部分の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　妻が唐櫃の中を見ると、翁が都から連れて帰って隠していた女性がいたということ。

イ　妻は鏡に映った自分の姿を見て、翁が都から女性を連れて返って来たのだと勘違いしたということ。

ウ　妻は都の様子を映す魔法の鏡を知らず、その中に本当に女性がいるのだと思ったということ。

エ　妻は都の様子を映す魔法の鏡を見て、翁が都に新しい妻を迎えたのを知ったということ。

オ　妻が夫に隠れて鏡を取り出すと、その様子を陰からのぞく女性に気が付いたということ。

問六　傍線部④「隠し置きけるなり」とありますが、「女房（妻）」は「翁」が何を隠して置いたのだと考えていますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　都で手に入れた財宝

イ　都で買った鏡

ウ　都から連れて帰ってきた女性

エ　鏡を買うための黄金千両

オ　女房に与えるための食事

問七　傍線部⑤「と思ひて」とありますが、女房（妻）がここで思った内容を抜き出し最初と最後の四字を答えなさい。

問八　傍線部⑥「散々に切り砕きけり」とありますが、この部分に関して以下の問いに答えなさい。

(1)　何を切り砕いたのですか。本文中から漢字一字で抜き出しなさい。

(2)　なぜ(1)を切り砕いたのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　翁が知らないうちに都から女がやってきて、妻を追い出してしまったから。

イ　妻は翁が黄金千両も払ったのだと後で知り、どうしても許せなくなったから。

ウ　翁の望むものが次々と現れて、さすがに気味が悪くなってきたから。

エ　翁が自分に隠しごとをしているのが許せず、翁の大切にしているものを壊そうと思ったから。

オ　妻が泣いて怒る原因となったものをなくせば、この場がおさまると思ったから。

問九　本文の内容に合致するものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　翁は鏡を買おうと思って都へ行った。

イ　翁は買った鏡を誰にも見せたくないと思った。

ウ　翁の妻は翁の浮気を知り、一人で苦しんだ。

エ　妻は翁が新しい女性を都から連れてきたと思った。

オ　翁は妻に説明するため近所の人の力を借りた。

四　傍線部の漢字の読みをひらがなで書き、カタカナは漢字に直しなさい。

1　**惜別**の涙にむせぶ。

2　事業計画を役員会に**諮**る。

3　必然の対義語は**グウゼン**である。

4　彼は**ハンセン**で大西洋を航海する。

5　私は彼女に**タントウチョクニュウ**に質問した。